

ヒックと宗教哲学の諸問題

芦名定道

1 はじめに

宗教哲学が、神学から自立した一つの学問分野として、つまり古典的な宗教哲学として成立したのは、カントあるいはシュライアマハーにおいてであったと言われるが、⁽¹⁾その後、宗教哲学は多岐にわたって展開され、現在、その輪郭は曖昧な状態に陥っている。こうした状況下で、宗教哲学の現状と今後の可能性を論じる手がかりとなるのは、各国・各地域の特有な哲学的伝統を背景に展開した宗教哲学の動向に注目することであろう。本稿では、学科としての比較的明確な形を有している英語圏の宗教哲学を取り上げ、宗教哲学の可能性について考察を行いたい。⁽²⁾具体的には、ジョン・ヒックにおいて——主著『宗教の解釈』を中心に——、宗教哲学の基本問題（宗教の概念規定、宗教批判への応答、宗教的多元性の理解からなる宗教哲学基礎論）がどのように展開されているかを概観することを通して、宗教哲学の問題状況について考えてみよう。⁽³⁾

日本では、ヒックについてはもっぱら宗教多元主義の提唱者として紹介され、関連の著作が多く翻訳されている。しかし、それはヒックの宗教哲学の一部分に過ぎない。ヒックの宗教哲学の全貌は、主著『宗教の解釈』（邦訳は存在しない）などを精読しなければならない。⁽⁴⁾ヒックの宗教哲学において、宗教的多元性の議論は、宗教批判（宗教の反実在論）への応答とそのための宗教の概念規定を基盤に展開されているのである。

本稿の議論は以下のような順序で進められる。第2章では、宗教哲学の基本問題のうち宗教批判に対するヒックの応答が論じられる。ヒックの初期から晩年までの思索において常に意識されていたのは、この問題にほかならない。続く第3章では、宗教の概念規定が、第4章では宗教的多元性をめぐる問題が扱われる。そして、最終章において、以上のヒックについての考察から宗教哲学の課題と可能性について、若干の指摘がなされる。

2 宗教批判への応答

古典的な宗教哲学の歴史的背景がそうであったのと同様に、ヒックにおいても、宗教哲学的思索は宗教批判を背景として始められた。近代以降の思想状況における宗教論、とくに哲学的な宗教論の特徴は、自然主義を基調とした無神論・宗教批判を含む議論と、伝統的な神概念（有神論）を肯定する議論とが、絡み合って存在する点に認められる。この二つの宗教論の潮流は、ヒックの宗教哲学の前提である。⁽⁵⁾つまりヒックは、これら二つ

の潮流が論理的には相互論駁不可能であること、世界（宇宙）における人間の経験としてはどちらも可能であることをまず確認する。

「宇宙の宗教的曖昧さによって、わたしが意味したいのは、宇宙が明確な特性をもたないということではなく、宇宙は現在のわたしたち人間の地点から、宗教的な仕方と自然主義的な仕方の両方において、思惟し経験することができるということである。この曖昧さが広く明らかになったのは、17世紀から19世紀における近代科学の隆盛以来のことに過ぎない。」（Hick, 2004(1989), 73)

「有神論的論証と反有神論的論証はすべて、決定的ではない。なぜなら、それらが訴える特別な証拠は反対の世界観の観点からも理解することができるからである。」（ibid., 12）

ヒックは、宗教の宗教的な解釈と非宗教的な（自然主義的な）解釈とが、いずれも、それぞれの論拠に即して可能であること、そして別の立場を論理的に論駁できるほど強力ではないことを論じている。⁽⁶⁾ 具体的には、『宗教の解釈』の第5章から第7章までにおいて、伝統的あるいは新しい論証方法として、存在論的、宇宙論的、デザインからの論証、現代の科学的論証、人間原理、蓋然的論証（スウィンバーン）、道徳的論証などが検討されるが、ヒックの論点は、「さまざまな哲学的論証が決定的でない」（ibid., 75）ということにある。もちろん、自然主義的な解釈——悪の事実に基づく有神論の否定も含め——も論理的には十分には強力ではないと主張されるわけであり、議論は、論証とは別にレベルに移されることになる。以下、ヒックで宗教批判に対する応答のより具体的な論点から重要なものをいくつか取り上げておきたい。

まず、注目したいのは、宇宙的な楽観主義（the Cosmic Optimism）である。次章で論じるように、ヒックが問題にするのは、人類の膨大な宗教現象の中で、現在の世界宗教に繋がる基軸時代以降の救済宗教であるが、ヒックは、この基軸時代以降の救済宗教が「宇宙がわたしたちの視点から見て究極的に善である」と主張する点で、宇宙的な楽観主義であると論じる。この宗教（救済宗教）の主張は、すでに述べたように、悪の現実などを「証拠」とした自然主義的な立場からの論駁に曝されており、両者の主張は宇宙についての相互に論駁不可能な二つの立場として位置づけられる。ヒックが、こうした議論を前提に、宇宙的な楽観論を支持するのは、以下の論点に基づいている。ここでは、しばしばウィトゲンシュタイニアン・フィデイストの代表とされるフィリップスに対する論考（1960年代に書

かれた諸論考に基づく「事実主張としての宗教」という論文)から引用したい。(7)

「キリスト教信仰の文脈では、神の人類に対する愛は・・・至上の質の生命を男と女に享受させるという創造的で神的な目的を指示している。・・・人間が恐れ、憎しみ、嫉妬、疑い、不安、無知、抑圧、そしてくじかれた可能性に生きている限り、神の人間に対する愛は無効にされ、神の愛情あふれる目的は成就されない。フィリップスは、神のよき目的が実際のところこの地上の生においては成就されなかった幾十億の人々を無視している。・・・苦しみがしばしば人間の人格を深め神により近づかせるものとなりうることは、幸いにも真実である。しかし、これがいつも、あるいは実に大抵、実際のことであると考えれば、それは非現実的であろう。フィリップスは、悪の問題を、シモーヌ・ヴェイユ、キルケゴールのような著述家、ドストエフスキーの主人公たち、苦しみの中で神を見いだした聖人たちを通して見ている。しかしその結果は精神的なエリート主義的な見方であり、人類の欠点ある多数の大衆を無視するものである。」(Hick, 1990, 31)

問題は、神の愛が死後において終末論的に実現することを説く宗教と、そのすべてを否定する自然主義とのいずれが、この世界で不幸なうちに死んでいく多くの人々にとって、「良い知らせ」(福音)であるかという議論である。この世界において神の愛は実現せず死ねばそれでおしまい、あとは何もないという主張は、多くの人々にとっては、「悪い知らせ」ではないか、少数の霊的エリートたちは別にして、悲惨なこの世界の現実がすべてであり、それを超えた何ものも存在しないというメッセージは人間に生きる勇気を与えることができるか、というのがヒックの論点である。(8)

以上は自然主義に対する論理的な論駁を意味しないが、ヒックは、英語圏の宗教哲学の伝統に立って、宗教的主張が事実的主張であるかぎり、そこには真か偽かの事実に認知的な差異の問題、つまり「検証」(あるいは反証)の問題が伴うと考える。もちろんこれは、日常的あるいは科学的命題についての通常の意味での検証ではありえない。ヒックが提案するのは、宗教的命題の終末論的検証という議論である。これはヒックの宗教哲学の発端に位置する『信仰と知識』(1957年)においてすでに提出されていた議論であり、その後多くの論争がなされたが、『宗教の解釈』(1989年)の段階でも基本的には保持されているように思われる(Hick, 2004(1989), 178-180)。ここでは、『宗教多元主義の諸問題』(1985年)に所収の「終末論的検証の再考」(1977年)から引用している。

「宇宙に関しての、また人間生活に生起する出来事に関しての有神論的概念は、たとえこれを検証する状況が現世を越えた最終的な、われわれのための神の目的の成就にある——たとえば、キリスト教によれば——とはいえ、たしかに経験的な検証が可能である。」(Hick, 1985, 111. 邦訳 194)

「検証されるべき断定は、人間存在とその環境において進行するあることならについての断定なのである。・・・善と悪との錯綜する現世の宗教的アンヴィバレンスは、認識上われわれを神から遠く隔てているので、一層十分な確証を求めようとする余地を残す。けれども、それは同時に神に対する自由な応答としての信仰を可能にもしている。・・・終末状況へと向かう運動は、伝統的に天国として象徴されている、最終的に曖昧さのない状況への推移——たしかにさまざまな中間的環境を経て——の過程における個人の漸進的変革をとまなう。この状況は、以下のような意味において宗教的に曖昧さのないものであろう。」(ibid., 117. 邦訳 204)

現時点（終末以前）では、宇宙の宗教的曖昧さのため、宗教的解釈と自然主義的解釈が併存できるが、宇宙の最終局面に達すれば、曖昧さが取り除かれ、宗教的主張の真か偽かの検証は可能になる。検証可能であるという点において、現在なされる宗教的主張は有意味であると言えるのである。これは、終末という将来の事態によってその有意味な身分が遡及的に保証されるという論法である。この終末論的検証という議論については、近代の懐疑論に対処するために考案された「その場しのぎの工夫」(ibid., 123. 邦訳 214)ではなく、ヒックにおいては、宗教批判に対する本格的応答の試みに属しているのである。

終末論的検証が宗教言語の「検証」の問題であることを考えるならば、これが宗教言語のめぐる実在論と反実在論という議論——宗教言語が指示機能を有するか否かについて——に繋がっていることは明らかであり、これが指摘したい次の論点である。⁽⁹⁾この実在論をめぐる論争こそが、まさに英語圏の宗教哲学を特徴づけている問題なのであり、『宗教の解釈』でも重要なテーマとなっている（認識論的部門である第二部の全体）。

ヒックの立場は、素朴実在論と反実在論に対する批判的実在論（カントの批判哲学以降の実在論）であるが、⁽¹⁰⁾ここでは、批判的実在論の主張にも密接に関わる「批判的信頼」(critical trust)についてのヒックの議論を確認しておきたい。これは、証拠に基づく場合のみ合理的であるというクリフォードの証拠主義（「不十分な証拠をもとにして何かを信

じることは、いつでも、どこでも、誰に対しても間違っている」) を論駁する仕方で行われる。⁽¹¹⁾ 問題は、クリフォードの証拠概念が、人間の合理性を理解するには狭すぎるという点である。これは、実在を日常言語や科学言語が指示する対象にのみ制限するという宗教言語に対する反実在論(宗教言語は実在を指示しない。いわば主観的で情緒的な表現にすぎない)が実在論として狭すぎるという議論と同じ問題系に属している。狭すぎる実在論と狭すぎる証拠主義の合理性理解とを、人間の生の現実にふさわしい仕方では拡張するという提案であり、ここで、ヒックが依拠するのはイギリス経験論の哲学的伝統である。

「ロックとバークレーに準拠し、そのため二十世紀のコモン・センス学派ないし日常言語学派の哲学者たちに支持されるヒュームは、私たちがつねに拠りどころとして生きている暗黙的な原理の定式化を可能にしてくれる。これは、とくに疑う理由のないかぎり、そこにあるように見えるものはそこに存在するものとして受け入れる、ということを目指している」、「通常、私たちは自らの経験を信頼している。また、もし信頼しなければ、一日たりとも、いや一時間たりとも生きていくことはできないだろう。しかし、これは盲目的な信頼ではなく、いつでも修正できる批判的な信頼である。もしも急に目が覚め、それが書斎にいてパソコンで仕事をしている夢であったとわかったならば、そのときにはよく思い返してみて、夢で見た経験は思い違いであった——夢は思い違いをさせるものだという特別な意味のもので——と考えなおすだろう。」(Hick, 2006, 129f. 邦訳 107-108)

人間の生の現実における暗黙の原理は、とくに疑う理由がない場合は、厳密な証拠が存在しないとしてもそれに信頼し、必要に応じて修正するという「批判的信頼」なのである。ヒックは、この日常的な生を支える批判的信頼を、宗教にも適応するように提案する。「では、どうしてこの『批判的信頼』の原理を、宗教体験も含めて、明かな認知体験一般に当てはめてはいけないのだろうか。」(ibid., 130. 邦訳 109)

近代の合理主義に基づく宗教批判に対するヒックの宗教哲学的応答は、批判的実在論と批判的信頼としてまとめることができるであろう。したがって、今後、批判的実在論を宗教言語論においてより詳細に展開することが宗教哲学の課題となる。⁽¹²⁾

3 宗教の概念規定をめぐって——宗教とは何か——

宗教哲学基本問題の2番目は、宗教の概念規定であり、古典的な宗教哲学では宗教本質

論と言われた問題である。すでに、前章の宗教批判への応答で、宗教の概念規定について必要な範囲で言及していたが、それは、宗教哲学の基本問題に属する三つの問いが相互に前提し合う仕方の一つの問題系を構成しているからである。

本章では、ヒックの宗教哲学における宗教の概念規定について、中心的な論点をまとめてみたい。まず確認すべきは、ヒックが実体論的な宗教の概念規定を採用していないということである。なぜなら、人類史における「宗教」として認知されてきた現象の多様性は、神あるいは神的なものといった実体的な信仰対象の共有としては理解できないからである。⁽¹³⁾そこで、ヒックが参照するのは、ウィトゲンシュタインの家族的類似性 (Family Resemblance) の概念である。⁽¹⁴⁾

「これら (宗教) を定義する際の戦略は、決定を具体化し、そしてコミットメントを顕わにし、あるいは隠している。それぞれの定義は、攻撃可能であり防御可能であり、これまでそうされてきた。実に多くの時間と労力が、『宗教』の競合する定義の間の論争に、長年にわたって捧げられてきた。しかし、ウィトゲンシュタインの家族的類似性概念の議論は、『宗教』がこうしたものとはかなり異なる種類のものである可能性を開いた。ウィトゲンシュタインはゲームの例を選んだ。ゲームは共通の本質を持たない。・・・わたしたちが、フットボールからチェスまで、子どもの人形を使った独り遊びからオリンピックゲームまでにわたる、この広範な活動の類別に、「ゲーム」という言葉を適用するのを可能にするものは、それぞれが家族におけるほかのものと重要な点において類似していることなのである。・・・一連の決定的な諸特性のかわりに、自然の家族のメンバーの間における体格、容姿、目の色、歩き方、気質などのような重なり合い交差する類似性のネットワークが存在する。」 (Hick, 2004(1989), 4)

この家族的類似性をもちいることによって、ヒックはさまざまな伝統や運動やイデオロギーのもつ宗教的性格を共通の本性を例証するものとしてではなく、家族内に見出されるような類似性と差異性の複合的な連続性を形成するものとして論じることができると考えている。こうした類似性を論じる上で注目すべきは機能の類似性であり、ヒックは、視野に入れる宗教現象の範囲を、基軸時代以降の世界宗教に連なる範囲に限定し、⁽¹⁵⁾そこに救済宗教という特徴を指摘する——ヒックはここで宗教現象学あるいは宗教史学の成果を参照している——。救済宗教の特徴は、「自己中心から真実在中心への転換＝人間存在の

変革」という機能にある。

「偉大なる基軸時代以降の諸伝統は、それぞれ異なった仕方で、通常の人間の生の悲惨さ、非実在性、矮小さ、歪曲を識別する救済的構造を提示し、実在と価値の究極的統一を肯定する。この究極的統一において、それとの関係において、現実存在の限りなくよりよい性質が可能になるのである。そして、諸伝統はその根本的によりよい可能性を実現する道を明らかにする。」 (ibid., 36)

「女性であれ男性であれ、自発的な自己超越性のために必要な自我の発達と成就を欠いているかぎり、自己成就した自我が過去に達成されたということは、真実在 (the Real) に対する真の関係にとって必要であろう。」 (ibid., 54)

ヒックが基軸時代以降の諸伝統として取り上げるのは、ヒンドゥー教、仏教、キリスト教、イスラームの諸伝統、とくにそれらにおける神秘主義的な要素である (『宗教の解釈』第3章)。ここで確認されるのは、基軸時代以前の民族宗教に典型的な自民族中心主義・自宗教中心主義 (排他主義的、絶対主義的) から、真実在中心への転回であり、救済宗教をネットワークでつなぐことを可能にする機能の類似性なのである。ポスト近代の思想状況においては、人間の経験の著しい多様性という観点から本質主義 (実体形而上学に基づく) を批判するという点が特徴的であるが、ヒックは、宗教の本質を実体的に定義するのではなく、後期ウィトゲンシュタインの家族的類似性を参照し宗教概念を機能において捉え直そうとしたと言えよう。このように宗教批判に対して応答しうるものとして提示された宗教は、自己中心的な人間の在り方を転換するという仕方で人間の「救済／解放」の道を示す機能を有しているのである。⁽¹⁶⁾

なお、ヒックは、宗教あるいは宗教的経験の解釈的要素 (「～として経験すること」) として信仰を論じる際に、再度ウィトゲンシュタインを参照している。⁽¹⁷⁾ この信仰の議論は、宗教の概念規定を行う際に、組み込まれるべきものであり、宗教の概念規定を十全に行うには、この解釈的要素に加え、 sacrament に関わる要素をも視野に入れる必要があるだろう。これは、今後の課題となる。

4 宗教的多元性の問題

宗教哲学の基本問題の3番目は、宗教的多元性の問題である。ヒックの宗教思想は、さ

さまざまな論争を引き起こしてきたが——処女降誕や受肉などの教義をめぐる——、⁽¹⁸⁾ ヒックにおける最大の論争は宗教多元主義をめぐるものであった。日本の議論においても、ヒックについては宗教的多元主義にのみ関心が集中する傾向が見られるが、この3番目の問題は、ヒックの宗教哲学において最後に展開したものであり、その正確な理解には、これまでの二つの問いをめぐる議論が前提とされねばならない。しかし、すでに第2の宗教の概念規定では、複数の宗教的伝統が問題となっており、「真実在中心」は、ヒックの宗教多元主義論の中心概念にほかならない。宗教哲学の議論は、突き詰めて行けば、この第3の基本問題を問わざるをえないわけであるが、ヒックの宗教多元主義論に入る前に、宗教的多元性と宗教多元主義との相違（関係）について確認しておかなければならない。宗教的多元性は、一つの社会や共同体に複数の宗教（伝統、信仰）が存在する状況についての記述概念であり、これは宗教をめぐる諸議論において共有されるべき認識である。⁽¹⁹⁾ それに対して、宗教多元主義とは宗教的多元性の状況について判断する場合の一つの選択肢であって、規範概念というべき性格を有している。また、ヒックの宗教多元主義について繰り返し問題とされてきた、排他主義、包括主義、多元主義の三つの立場は、さまざまな宗教論において共有された諸類型と考えるべきであろう。

ヒックが宗教多元主義を提唱することになった背景には、1967年にバーミンガム大学神学部で神学・宗教哲学担当として赴任し、バーミンガム市の宗教的多元性の問題状況に対してバーミンガム市地域社会関係協議会委員長（1967年～74年）として関与した経験が指摘できる。

「長い植民地支配の歴史の陰影がロンドン、バーミンガム、その他の英国都市にただよっていて、その場に定着しようとする新しい移民たちに対する偏見は絶えることがなかった。そうした偏見は雇用、住居、教育、医療、福利厚生、宗教にわたる広範囲な、そして効果的な差別のなかで表わされた。・・・こうした実情に対応して、公式的な団体あるいはボランティアの団体がいくつもあらわれ、・・・差別反対の運動や、正義と平等をめざす社会の実現が叫ばれた。バーミンガム市で、私はそうした団体の一つに加わって活動するかわら、・・・他方でAFFOR（All Faiths For One Race）というボランティア団体の創作者の一人になり、しばらくの間であったが、初代の会長をつとめた。」（Hick, 1985, 5f. 邦訳 25-26）

バーミンガム市のような多元的状況において、公正な多元的社会的実現をめざした運動に参加した経験を神学思想として展開したものが、宗教多元主義なのである。これは、まず、『もうひとつのキリスト教』（1968年）の「第四章 キリスト教と他宗教」として、そして『神は多くの名前をもつ』（1980年）でまとまった仕方で提出され、『宗教多元主義の問題』（1985年）に結実した。この間、ヒックの宗教多元主義の立場については、激しい議論がなされ、さまざまな批判に対して、宗教多元主義を宗教哲学的な考察を経て宗教多元主義仮説として再提出したのが、本稿で参照してきた『宗教の解釈』（1989年）なのである。また、宗教多元主義をめぐる哲学的また神学的な批判とそれに対するヒックの応答については、『宗教がつくる虹』（1995年）から知ることができる。

宗教多元主義は、宗教的多元性についての対立する立場（類型）である排他主義、包括主義と対比して説明することができる。⁽²⁰⁾ 諸宗教においては、たとえば、ヒックが注目する基軸時代以降の世界宗教では、救済という共通の問いが立てられて、それぞれ救済に至るための真理が主張される。救済と真理に到達するための道をそれぞれ提案する他の諸宗教がキリスト教から見てどのように評価されるかという点で、排他主義は、救済と真理に至る道はキリスト教のみであると主張する。キリスト教が救済と真理を独占するものとされ、他の諸宗教は救済と真理から排除される。また、包括主義は、現象レベルでは、諸宗教についても救済と真理への道である（ありうる）ことを承認するが、それらの真理性は、キリスト教のなかに包括される限りにおいてのみ認められるに過ぎない。他の諸宗教が提示する真理は、キリスト教の真理と合致する限りにおいてのみ、真理として認められるのであり、他の諸宗教において真理を教える宗教者は、本人の自覚がどうであろうとも、実質的には「匿名のキリスト者」と考えられるのである。これらに対して、多元主義は、救済と真理に至る道が複数存在している、キリスト教の独占物ではないとする立場である。このような類型論的な議論は、ヒックの宗教哲学のその後の展開においても、基本的に保持されている。

以上の宗教的多元性をめぐる三つの類型の一つとして展開される宗教多元主義は、理論的にさまざまな問題点を有している。神学的には、キリスト論との関連が最大の問題点であるが、⁽²¹⁾ その他にも、たとえば、多元主義が「類型」であることに関しても、問題が少なくない。排他主義も包括主義も、それに比較的好く合致する議論は古代キリスト教以来、さまざまに確認できる。排他主義は、「教会の外に救い無し」（キプリアヌスなど）として表明され、包括主義は、ソクラテスもキリスト教徒であるとの議論を可能にしてい

る点でユスティノスのロゴス論にも認められるかもしれない。⁽²²⁾しかし、排他主義も包括主義も、この二つの立場は、一見正反対と思えるとしても、実はそれほど異なるものではない。つまり、具体的な宗教論として展開しようとするとき、包括主義は実質的に排他主義に接近することがわかるのである。キリスト教に真なるすべての宗教が包括されるということは、排他主義とどれほどの距離があるだろうか。ヒックの宗教多元主義についても、そこに隠されたキリスト教的立場を指摘することもできるであろう。また、宗教的多元主義という類型は、さまざまな仕方において展開可能であり、ヒックの宗教多元主義は多様な宗教多元主義の一つに過ぎない。つまり、三つの類型は、宗教的多元性をめぐる錯綜した議論を整理するための大枠として用いるべきであり、具体的な理論的展開においては、三類型のさまざまな組み合わせが可能なのである。個々の思想家の議論をいずれかの類型と単純に同一視する議論は厳密でも生産的でもない。

自らの宗教的多元主義を説明する際に、ヒックは、真実在という宗教的中心点のまわりには、真実在の具体的な経験の仕方、現象形態として、歴史的な諸宗教が配置される、というモデルを使用するが、その場合にヒックは、このようなモデルの基礎に、物自体と現象をめぐるカント哲学の議論、さらにはトマスの議論（「知られるものは知る者の様式にしたがって知られる」）を位置づけている。しかし、真実在が何であるのか、それはカントの言う理念なのかなど、基本的な点が必ずしも明確ではない。真実在は一種の実体的なものなのか、それはキリスト教的な神の隠された名前ではないのか、あるいは真実在は複数のものかと考えるべきではないか（その場合には無限遡及のパラドクスが問題となるかもしれない）など、疑問はさまざまに浮かんでくる。⁽²³⁾ヒック自身、宗教多元主義が排他主義と包括主義に対する一つの類型であること、それに関し問われるべき問題点が存在することや、理論として具体化する点でも問題が残されていることを意識したように思われる。これは、『宗教の解釈』において登場する「宗教多元主義仮説」(The Pluralistic Hypothesis)の「仮説」という表現から読み取ることができる。⁽²⁴⁾ヒックの提示する宗教多元主義は、一つの仮説であり、検証を必要とし修正・改良を要する理論である——そもそも神学的事柄（神や恩寵など）について人間が構築する理論は仮説に過ぎない——。そうであるならば、宗教多元主義はすでに完成されたものではなく、理論的にさらなる追及を要するものということになるだろう。しかし、残念ながら、宗教多元主義仮説の「仮説」についてのヒックの説明は、あまりにも不十分である。それは、『宗教がつくる虹』の「第1章 多元主義仮説」においても、同様である。ヒックの宗教多元主義は、今後さらに追及される

べき課題として残されているのである。

5 まとめ

本稿でヒックにおいて確認してきたように宗教哲学の三つの基本問題は、相互に結びつくことによって宗教研究の哲学的基礎となっている。もちろん、これらの三つの問題の相互関連を自覚的に体系的に展開した本格的な宗教哲学は多くはない。しかし、個々の各論的な小論においても、これらの基本問題は常に背後に控えており、議論を突き詰めて行う際には、問題としてさまざまに浮上することになる。ヒックのように基本問題の全体が相互に結び付いて展開される例はまれではあるが、しかし、その類似の問題設定は、古典的な宗教哲学の出発点であるシュライアマハーにおいて、また 20 世紀の代表的な宗教哲学である、ティリッヒや波多野精一においても確認できる。⁽²⁵⁾

これまでの議論から、宗教哲学の新しい可能性を考える上で留意すべき課題として、次のような問いが確認された。批判的実在論を宗教言語論において展開すること、信仰という解釈学要素に sacrament のような儀礼的要素をも加えて、宗教の概念規定をより十全な仕方で展開すること、そして宗教多元性をめぐる理論構成（仮説）をさらに精密に構築すること。これらの課題は、宗教哲学を構想する上でいずれも重要なものであるが、現代日本の思想状況において、この問題を展開する場合に、ヒックの議論にはさらにどのような可能性が見いだされるだろうか。ヒックの議論は、現代日本に問題ともさまざまな類似点を有しており、十分に参照することができるように思われる。たとえば、ヒックが立つ英語圏の宗教哲学は、キリスト教思想における伝統的な自然神学の議論と多くのものを共有しており、また現代思想（分析哲学や科学哲学）における言語論や認知の問題についても積極的に言及されている。これらの点で、ヒックの宗教哲学は日本の宗教哲学においても引き続き参照に値するものと言える。

また、すでに指摘したように、ヒックには多くの論争を引き起こすような刺激的な議論が多く含まれている。新しい問題（たとえば、脳科学）への積極的な言及は、ヒックの魅力的な点である。しかし、その一方で、近代以降のキリスト教思想においては、十分に論究されることがない伝統的な諸問題が取り上げられている。たとえば、死後をめぐる問題である。⁽²⁶⁾ 天国、地獄、煉獄は伝統的なキリスト教の問題であるにもかかわらず、現代のキリスト教思想では積極的に取り上げられることは多くない。同様のことは、天使や悪魔についても、指摘できるであろう。こうした問題は、近代以降の科学的世界観をキリス

ト教が少なからず共有することによって顕著になった傾向であるが、これは、現代日本の状況をも規定している。こうした伝統的な諸問題が最初からあたかもキリスト教において存在せず、いわば真性の神学的問いではなかったかのような取り扱いは、キリスト教思想として十分なあり方とは言えないであろう。ヒックは新しい問いのみを追及しているのではなく、古いとも思われる問題についても、誠実に思想的な取り組みを試みており、キリスト教的伝統に対するこの態度は、日本においてキリスト教的な宗教哲学を考える際に、継承すべきものなのである。

引用文献

本稿では、以下の文献は（Hick, 1990, 27）といった略号で引用される。

- ・（Hick, 1985）：John Hick, *Problems of Religious Pluralism*, Macmillan, 1985.（邦訳『増補新版 宗教多元主義——宗教理解のパラダイム変換』法藏館、2008年。）
- ・（Hick, 1990）：John Hick, *A John Hick Reader* (ed. By Paul Badham), Macmillan, 1990.
- ・（Hick, 2004(1989)）：John Hick, *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Second Edition, Yale University Press, 2004(1989).
- ・（Hick, 2006）：John Hick, *The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent*, Palgrave, 2006.（邦訳『人はいかにして神と出会うのか——宗教多元主義から脳科学への応答』法藏館、2011年。）

注

(1) 宗教哲学の成立時期については、すでに次のように基本的な合意が存在する。古典的な宗教哲学のはじまりを、カント、シュライアマハーに求める見解は、たとえば、波多野精一『宗教哲学序説』（1940年。『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、2012年）において、「正しき宗教哲学」の「第四章 歴史的瞥見」で、その哲学的発端として、カント、シュライアマハー、ヘーゲルが扱われている通りである。また、西谷啓治「宗教哲学——研究入門」（1949年。『西谷啓治著作集』第6巻、創文社、1987年、139-191頁）でも、次のように述べられている。「吾々は、宗教哲学が学問として成り立った始めを、カントに置くことを適當と考へる」（139頁）、「勝義に於ける宗教哲学の祖と見なされる人はシュライエルマッヘルである」（144頁）。

(2) 国や地域により、宗教哲学の伝統は大きく異なっている。たとえば、前注で見た宗教哲

学の古典的形態はドイツの哲学的伝統と緊密に関わり合っているが、英語圏では、キリスト教思想のより古い自然神学と呼ばれる伝統との関連が顕著であり、それは、英語圏における哲学的神学あるいは宗教哲学についての教科書的文献において明瞭に確認できる。その点で、次のヒック『宗教の哲学』 (*Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963 (1990)。邦訳『宗教の哲学』ちくま学芸文庫、2019 (1994)年) は模範的である。

Introduction: What Is the philosophy of Religion?

Chapter 1: The Judaic-Christian Concept of God

Chapter 2: Arguments for the Existence of God

Chapter 3: Arguments Against the Existence of God

Chapter 4: The Problem of Evil

Chapter 5: Revelation and Faith

Chapter 6: Evidentialism, Foundationalism, and Rational Belief

Chapter 7: Problems of Religious Language

Chapter 8: The Problem of Verification

Chapter 9: The Conflicting Truth Claims of Different Religions

Chapter 10: Human Destiny: Immortality and Resurrection

Chapter 11: Human Destiny: Karma and Reincarnation

For Further Reading

宗教的多元性を扱った第9章や、死後に関する宗教的な諸伝統の議論を扱った第10章や第11章は、1960年代以降の「宗教の神学」の動向と重なるものであるが、第2章～第4章は、伝統的な自然神学の問題であり、認識論や言語論に関わる第5章～第8章は、イギリスの哲学的伝統を反映している。同様の構成は、Richard Swinburne, *The Existence of God*, Second Edition, Clarendon Press, 2004 (1999) においても確認できる。英語圏の宗教哲学には、宗教の概念規定、神の存在・実在性（神の存在論証）、宗教経験の検証・反証・合理性、宗教的実在の認識論、宗教言語論、悪の問題、宗教批判、宗教多元性、死と死後などのテーマが含まれ、そこには英語圏の哲学思想の動向が反映されているだけでなく、さらにその背後に自然神学（自然神学は、「神学」というよりも、「哲学」である）の伝統が存在し、それが意識的に継承されている。ヒック宗教哲学は、この中に位置づけられる。

(3) 宗教哲学の基本問題として、宗教批判、宗教の概念規定、宗教的多元性の三つの基本的

な問題を位置づける点については、芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』（北樹出版、1994年）を参照。

(4) ヒックの宗教哲学の全体像を理解する上で、John Hick, *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989 はまず参照されるべき著作であるが、とくに、この初版以降の諸批判を念頭に書かれた、第2版（2004年）の「第2版への序論」は、ヒック理解にとってきわめて有益である。なお、次の論集は、ヒックの宗教哲学の全体を扱っている。間瀬啓允、稲垣久和編『宗教多元主義の探究——ジョン・ヒック考』大明堂、1995年。

(5) シュライアマハー『宗教論』は、まさにこの典型である。つまり、第一講話「弁明」は宗教批判への応答であり、第二講話「宗教の本質について」は宗教の概念規定を、そして第五講話「さまざまな宗教について」は宗教的多元性を扱ったものと解される。なお、ヒックの思想形成期（第二次世界大戦後から60年代にかけて）の英米における宗教論をめぐる思想状況については、ヒック自身の『自伝』（2002年）以外に、次の文献の第5章からも、知ることができる。Alister E. McGrath, *Surprised by Meaning. Science, Faith, and How We Make Sense of Things*, Westminster/ John Knox Press, 2011.

(6) 神の存在論証と悪論（神義論）との論理構造の関連性については、プランティンガの1連の文献（分析神学とも言われる）が参照できる。たとえば、次の文献。

・ Alvin Plantinga, *God and other minds. A study of the rational justification of belief in God*, Cornell University Press, 1967. (第一部では、宇宙論的、存在論的、目的論的な神の存在論証が自然神学として扱われ、第二部では、悪の問題を含む自然的な反神学 (Natural Atheology) が扱われる。)

・ Alvin Plantinga, *Warranted Christian Belief*, Oxford University Press, 2000. (これは、プランティンガの思索の全貌を示す著作とも言えるが、ヒックについてのまとまった議論が含まれている。)

(7) この論考（「事実主張としての宗教 (Religion as Fact-asserting)」）は、ヒックのいくつかの論集に収録された、比較的有名な文献であるが、本稿では、次の論集から引用した。John Hick, *A John Hick Reader* (ed. By Paul Badham), Macmillan, 1990.

(8) ここでヒックが展開する論点（人類の多くの人々にとっての「福音」）は、宗教哲学が哲学的理論という側面だけでなく、いわば実践的意義という側面を有していることを示唆している。つまり、宗教哲学は宗教「哲学」であると同時に、「宗教」哲学なのであって、

実定宗教との緊密な関係性は、宗教哲学の前提に属しているのである。それは、ヒックはもちろん、シュライアマハー、ティリッヒ、波多野らにおいても確認できる点である。またこれは、ヒックが牧師としての経験を有していることとも無関係ではないだろう。

(9) 宗教言語の指示と実在論・反実在論との問題連関については、次の拙論を参照。

芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』（北樹出版、1994年、155-196頁）、『ティリッヒと弁証神学の挑戦』（創文社、1995年、243-328頁、「宗教的実在と象徴——波多野とティリッヒ」（現代キリスト教思想研究会『近代/ポスト近代とキリスト教』2012年、3-21頁）、「キリスト教思想と宗教言語——象徴・隠喩・テキスト」（日独文化研究所年報『文明と哲学』第8号、こぶし書房、2016年、196-209頁）。

(10) ヒックにおける実在論・反実在論をめぐる問題については、次の小倉和一の諸論考を参照。

小倉和一「ヒック宗教的多元論の科学論的構造」（京都大学基督教学会『基督教学研究』第19号、1999年、99-110頁）、「宗教的複数主義とパトナムのプラグマティックな実在論」（京都大学基督教学会『基督教学研究』第21号、2002年、55-73頁）。

(11) John Hick, *Philosophy of Religion*. Fourth Edition, Prentice Hall, 1990 (1963), p.72. (邦訳『宗教の哲学』ちくま学芸文庫、2019年、168頁。)

(12) 批判的実在論は、現代思想において広く共有された実在論の議論であるが（カントの批判哲学以降の実在論の試みの一つの形態）、ヒック自身の説明としては、次の文献を参照。John Hick, *The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent*, Palgrave, 2006, pp.137-140. (邦訳『人はいかにして神と出会うのか——宗教多元主義から脳科学への応答』法藏館、2011年、119-125頁。) また、批判的実在論としては、ギルキーも次の文献で、神学的議論を展開している。

Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress, 1993.

(13) 宗教概念の実体論的規定の問題については、次の拙論を参照。芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年、71-86頁。

(14) ヒックの宗教哲学は、本稿で示したように、ウィトゲンシュタインの後期哲学と緊密な関わりにあるが、ヒックがウィトゲンシュタインについての理解を深めたのは、コーネル大学で宗教哲学を講義した時代（1953-59年）であったと思われる。「コーネルでの三年半の間に、私はウィトゲンシュタインやムーアについて、また教え方について、実に多く

のことを学んだ」（ジョン・ヒック『ジョン・ヒック自伝——宗教多元主義の実践と創造』トランスビュー、2006年、151頁）。なお、ウィトゲンシュタインの宗教哲学については、次の文献を参照。星川啓慈『ウィトゲンシュタインと宗教哲学——言語・宗教・コミットメント』（ヨルダン社、1989年）、『増補 宗教者ウィトゲンシュタイン』（法蔵館、2020年）。

(15)ヤスパース（『歴史の起源と目標』1949年）は、「基軸時代」（*Achsenzeit*）によって、洋の東西を問わず、BC.500年度の前後数世紀に確認できる、普遍的な合理性あるいは倫理性をめざす思想（哲学、倫理、宗教）が出現した精神革命の時代を論じている。

(16)「人間存在の自己中心から実在中心への変革」というヒックの宗教理解については、エコロジーの神学の立場から評価されるなど（サリー・マクフェイグ『ケノーシス——大量消費時代と気候変動危機における祝福された生き方』新教出版社、2020年、を参照）、その意義については今後積極的な議論がなされるべきであろう。

(17)この点についても、ヒックは繰り返し議論しているが、本稿では、*John Hick, A John Hick Reader* (ed. By Paul Badham), Macmillan, 1990.に収録された「〈として経験すること〉としての信仰」（*Religious Faith as Experiencing-as*）を参照した。

(18)ヒックが引き起こした（あるいは、巻き込まれた）論争については、2002年に出版のヒックの自伝（邦訳『ジョン・ヒック自伝——宗教多元主義の実践と創造』トランスビュー、2006年）、また『宗教多元主義の問題』（邦訳は、『宗教多元主義——宗教理解のパラダイム転換』法蔵館）の「第一章 三つの論争」を参照。

(19)宗教多元主義は、*Religious Pluralism* の訳であり、ほぼ定訳として定着している。しかし、意味内容から考えれば、「多元性」「多元主義」よりは「複数性」「複数主義」が適訳と思われる。多「元」論は、哲学の伝統的な一元論や二元論と同じ「元」の意味で、つまり原理の意味で使用するのが適切であり、いわゆる「宗教多元主義」は、この原理というレベルでの「多元」ではなく、数的な「複数」を意味しているからである。一度定着した訳語を修正することは容易ではないが（あるいは適切ではないが）、その意味内容については、明確な理解が求められるべきである。

(20)この三類型は、A・レイスに遡ると言われるが、ヒックを通じて有名になり、現代神学において「宗教の神学」として分類される神学思想では広く共有されている。「宗教の神学」については、古屋安雄『宗教の神学——その形成と課題』（ヨルダン社、1985年）を参照。また、星川啓慈は、宗教間対話を批判的に考察する中で、「排他主義」は「専心

主義」と訳すべきであると論じている（星川啓慈『宗教と〈他〉なるもの——言語とリアリティをめぐる考察』春秋社、2011年、234頁）。

(21)キリスト論が争点であることは、「唯一で真の主としてのキリスト」というキリスト論が、排他主義と親和性があると考えられる点からも了解できることであり、それは、次の二つの論集を、対比することによって明らかになるであろう。

・ John Hick and Paul F. Knitter (eds.), *The Myth of Christian Uniqueness. Toward a Pluralistic Theology of Religions*, Orbis, 1992. (ヒック、ニッター編『キリスト教の絶対性を超えて——宗教的多元主義の神学』春秋社、1993年)。

・ Gavin D'Costa (ed.), *Christian Uniqueness Reconsidered. The Myth of Pluralistic Theology of Religions*, Orbis, 1998. (G・デコスタ『キリスト教は宗教をどう考えるか——ポスト多元主義の宗教と神学』教文館、1997年。)

キリスト論をめぐる「宗教の神学」における論争を乗り越えるものとして、三位一体論的な宗教の神学という試みもしばしばなされている。これについては、次の文献が挙げられる。

・ Pan-Chiu Lai, *Towards A Trinitarian Theology of Religions. A Study of Paul Tillich's Thought*, Kok Pharos, 1994.

・ Veil-Math Käkkinen, *Trinity and Religious Pluralism. The Doctrine of the Trinity in Christian Theology of Religions*, Ashgate, 2004.

(22)ユスティノスのロゴス論については、土井健司「弁証家ユスティノス(1)——私たちのキリストはロゴスそのものです」(『福音と世界』2020.3、新教出版社、48-51頁)、「弁証家ユスティノス(2)——神の力としてのロゴス」(『福音と世界』2020.4、新教出版社、48-51頁)を参照。

(23)こうした諸問題がヒックの議論からどのように答えうるか、あるいは答えられないかについては、『宗教の解釈』の第14章「多元主義仮説」と、『宗教がつくる虹』(とくに第2章)を検討するところから始めなければならないだろう。

(24)神学的主張の仮説性については、同時代の神学者パネンベルクにおいても確認することが可能であり(芦名定道『現代神学の冒険——新しい海図を求めて』新教出版社、2020年、320頁)、両者は、検証・反証という科学論における議論を共有している。この点は、宗教哲学の新たなる展開を試みる際に留意すべきテーマとなるだろう。

(25)シュライアマハーについては、注5で、『宗教論』に限定して宗教哲学の基本問題の

問題設定を確認したが、『宗教論』だけでなく、『信仰論』まで射程に入れば、どうなるだろうか。ティリッヒについては、注3に示した拙論を参照いただきたい。宗教批判への応答や宗教の概念規定については、思索の発展史の全般にわたって確認できるのに対し、宗教的多元性についての十全な議論は晩年期を待つ必要があった。これは、ティリッヒだけでなく、キリスト教神学一般において「宗教の神学」が自覚的に追及されるのが、ティリッヒの晩年期以降であったことから了解可能であり、波多野においては、宗教的多元性の問題は顕在化しないままにとどまった。

(26) ヒックにおける「死後の問題」については、初期の『宗教の哲学』（1963年）の第10章「人間の運命——不死と復活」、第11章「人間の運命——カルマと生まれかわり」においてすでに確認可能であり、それは、晩年の『宗教と科学の新しいフロンティア』（2006年。邦訳は『人はいかにして神と出会うのか』）における第18章「死後？」（After Death?）、『信仰と懐疑の間』（John Hick, *Between Faith and Doubt. Dialogues on Religion and Reason*, Palgrave, 2010.）の第14論文「死後の生？」（Life after Death?）まで続いている。